

井上桂園先生著作目録

著書

三体学書楷梯	昭和7年		小学習字 一年用	昭和25年4月	共同図書
昭和三十六人集楷書大行路	昭和10年	雄山閣	〃 二年用	〃	〃
四時説書楽三体帖	昭和10年		〃 三年用	〃	〃
三体唐詩帖	(不明)	(不明)	〃 四年用	〃	〃
三体書範	(不明)		〃 五年用	〃	〃
三体新書範	昭和11年	松林堂	〃 六年用	〃	〃
三体新書鑑	(不明)	(不明)	小学習字 基礎篇	昭和26年4月	湯川弘文社
陋室銘			〃 りめ	〃	〃
楷書秋声賦			〃 まつ	〃	〃
楷法指針	昭和18年3月	良い子の習字 四年用	〃 さくら	昭和27年4月	広島図書
行法指針			〃	〃	〃
草法指針			小学習字の友 四年用	昭和27年7月	湯川弘文社
小学手習帖	昭和22年5月	広島図書	〃 りめ	〃	〃
楷書篇			〃 まつ	〃	〃
かな篇			〃 さくら	〃	〃
墨場必携——第一輯——	昭和24年		墨場必携——第二輯——	昭和28年4月	臥虎南荘
新習字 上	昭和24年4月	広島図書	小学書き方 一年生用	昭和30年5月	大阪書籍
〃 中			〃	〃	〃
〃 下			小学書き方 二年生用	〃	〃

三年生用

小学習字 四年

五年

六年

孟法師碑附桂園臨

蘭亭叙附桂園臨

書譜附桂園臨

漢字の基本

年賀状の書き方 昭和31年用

かきかたのてほん

しょうがくしゅうじ 低学年用

賀状の書き方 昭和32年用

賀状の書き方 昭和33年用

習字範書

賀状 昭和34年用

条幅入門

耕心の友 小学校低学年用

小学校高学年用

中学生用

十七帖附桂園臨

賀状 昭和35年用

楷書春夜桃李園序

行書春夜桃李園序

賀状 昭和36年用

37年用

昭和30年5月 大阪書籍

昭和30年 神戸市習字研修部

教科書

昭和30年4月 耕心書道会

昭和31年5月 中教出版

昭和31年6月 大阪書籍

昭和31年11月 西文明堂

昭和32年11月 中教出版

昭和33年 西文明堂

昭和33年11月 中教出版

昭和34年 西文明堂

昭和34年3月 中教出版

昭和34年8月 耕心書道会

昭和34年9月 耕心書道会

昭和34年11月 西文明堂

昭和35年1月 岩崎書店

昭和35年11月 西文明堂

昭和36年11月 西文明堂

昭和37年11月 西文明堂

賀状 昭和38年用

昭和37年11月 西文明堂

初等科かきかた

一 指導書

昭和15年

文部省

初等科書き方

二 指導書

昭和16年

文部省

初等科書き方

三 指導書

昭和16年

文部省

初等科書き方

四 指導書

昭和16年

朝鮮総督府

初等科書き方

五 指導書

昭和17年

文部省

初等科書き方

六 指導書

昭和18年

文部省

高等科書き方

一 指導書

昭和18年

文部省

高等科書き方

二 指導書

昭和18年

文部省

翻刻てほん

上(一年用)

昭和21年5月

文部省

翻刻てほん

下(二年用)

昭和21年5月

文部省

翻刻初等科習字

一(三年用)

昭和21年5月

文部省

翻刻初等科習字

二(四年用)

昭和21年5月

文部省

蹴刻初等科習字	三(五年用)	昭和21年5月	文部省	書道 下		昭和27年6月	中教出版
蹴刻高等科習字	四(六年用)	昭和21年6月		かきかた(改訂版)	一ねん上	昭和28年2月	
	一(第一学年男子用)	昭和21年6月			二ねん上		
	二(第二学年男子用)				下		
よいこのかきかた	一ねん	昭和26年6月	広島図書				
	二ねん						
良い子の書き方	三年			書き方(改訂版)	三ねん上		
	四年				ねん下		
	五年				四年A		
	六年				B		
習字 上		昭和27年2月	中教出版		五年A		
習字 中					B		
習字 下					六年A		
習字指導要領		昭和27年4月		習字(改訂増補版)	B	昭和29年1月	
かきかた	一ねん上	昭和27年6月			上		
	下				中		
	二ねん上				下		
書き方	三ねん上			習字指導要領(改訂増補版)		昭和29年1月	
	下			しょうがくかきかた	一ねん上	昭和30年	大阪書籍
	四年B				下		
	五年B				二ねん上		
	六年B				下		
書道 上				小学書き方	三年上		
書道 中					下		
					四年上		
					下		

井上桂園先生略年譜

明治三十六年（当歳）

三月二十三日、若林賢二の次男として、岡山県吉備郡蘭村字立阪に出生。生家は、山峽の、周囲に四軒しかないという小部落にあり、父は花筵業を経営、手織機の改良工夫をしたり、花筵の花模様を織り出す独特の方法を案出して業界に貢献するなど、小さい発明家として知られていた。

明治四十二年（六歳）

四月、村立西蘭小学校に入学。性格はおとなしく内気であった。祖母井上千賀は、この頃から養子として井上家を継がせるべく目をかけ、教員に育てたいといって伯父の家へ勉強にやり、習字も習わせた。

明治四十二年（七歳）

一月、中国民報社（岡山）の書きぞめ紙上展に入賞。はじめて筆蹟と姓名が新聞紙上に載ったこの時の感激が、後日、将来の方向決定に際して一動機としてつながることになる。

大正四年（十二歳）

三月、蘭小学校を卒業。六か年を通して学力・性行ともにすぐれた模範生として知事から表彰された。師範学校進学の手定であった。

たので、中学を受験せず、そのまま高等科にすすんだ。

大正五年（十三歳）

四月、担任の熱心なすすめで岡山県立矢掛中学校（現矢掛高校）に入学。在学五年間、往復三十数キロの道を自転車で行き通した。習字は川井猿城という玉木愛石流の先生から、愛石の手下によって一年から三年まで学ぶ。三年の頃、従兄の大窪桂石氏が盛んに習字をやっているのに強くひかれて「斯華会」（小野鷲堂主宰）に入会、号を谿楓と名のって毎月競書に出品。

大正八年（十六歳）

三月、大同書会に入会。号を桂園と改め（立阪山の頂上に丈余の立石があり、「かつら石」と言った。その「桂」と蘭村の「園」とをとってつけたもの）出品を続けた。

大正九年（十七歳）

蘭小学校訓導田辺氏の習字科文検合格に刺戟され、その紹介で丹羽海鶴に入門、通信教育を受けはじめた。

大正十年（十八歳）

三月、矢掛中学校卒業。この時から祖母の宿願だった井上家相続の手續きを終え、井上姓を名のことになった。九月まで、代用教

員として庭瀬小学校・総社小学校に勤務。九月、岡山師範本科第二部に入學。習字は大原桂南に師事することになったが、早くもその才を見抜かれ、激励を受けて、大いに感激。学校での学習以外にもたびたび宅に伺って教えを受け、また師の主宰する黄薇書道会の仕事も手伝いはじめた。この頃から、師・書友のすすめもあって、文検受験のほぞを固め、猛練習にはいった。

大正十一年（十九歳）

この頃は各種の書道雑誌でも成績は上位に定着し、若年ながら文検合格の最右翼と認められるまでになった。五月、予備試験を受けて合格。続いて、全国からの予備試験合格者四十名を対象に、文部省で行なわれた本試験を受験。七月、岡山師範本科二部卒業。九月、文検本試験合格の報に接し、ここに最年少合格者が誕生し、一躍注目を集めることになった。京都師範・山口師範等からの採用交渉をこたわり、前任校総社小学校に赴任。十二月、師桂南をたずけて第一回黄薇書道講習会を開催、京阪・四国・九州からも参加者があつて成功した。以後、岡山を離れるまで毎夏・冬の定期行事として続け、中心となつて働いた。

大正十二年（二十歳）

四月、岡山県立第二中学校教諭を兼務。このころから、個人的に教えを求めて次々に入門者が訪れた。それらの人々が、現在、岡山大学の絹田岐陽氏・大館桂堂氏はじめ、岡山県書道教育界の中堅以上となつて強力な書道王国を形成している。この頃、中央・地方の書道雑誌ではもはや最高水準を動かす、各種書道展には常に高位に入賞して、中央書壇でも少壮実力者として輝かしい存在となつた。

大正十三年（二十一歳）

四月、岡山県立第二中学校専任教諭となる。この頃から各地の文検志望者に通信指導も始め、以来、毎年門人関係者から、少ない時で三人、多い時には十名近くの文検合格者を出すようになった。

大正十四年（二十二歳）

五月、日本美術協会書道展に出品して入賞。この年から大阪・奈良・兵庫等での書道大講習会で、丹羽海鶴・比田井天来・小琴・尾上柴舟・川谷尙亭・近藤雪竹・井原雲涯・樋口銅牛・山本竟山といった当時の大家に伍して、助手として、或は助講師として活躍しはじめた。

大正十五年（二十三歳）

四月、日本美術協会書道展に続いて入賞。十一月、書道作振会展にも入賞。

昭和二年（二十四歳）

新春、渡辺益太郎氏長女童と結婚、当時夫人は大阪市の小学校に勤め、土帰月往の生活がしばらく続いた。この年、甲子書道会主催第一回全国書道展で最高賞を受け衆目をあつめた。作品は光明皇后御書楽毅論の節臨。

昭和三年（二十五歳）

二月、長男徹誕生。三月、夫人は小学校を退職して以後家事育児に専念。この月、成辰書道会展で最高賞（高松富賞）を受けて書名はいやが上にもあがつた。

昭和六年（二十八歳）

三月、熊本師範ならびに熊本女子師範学校教諭として赴任。第五高等学校校友会クラブの指導も担当した。以来、八年間、当時と

しては書道界においても全くのいなかであったこの地の書道文化向上のために、献身的に働いた。学校における指導はもちろんのこと、夏冬の休みには毎度県下および近県の教員・一般愛好家を対象に講習会を開いて指導・啓発につとめ、児童生徒には展覧会や競書会を興して書道熱醸成につとめるなど、その動きは精力的であった。現在、熊本県書道教育界の中心となつて活躍している熊本大学の齋藤鶴跡氏はじめ、小・中・高校書道教育界の大部分はその指導を受けたものである。離熊の際、県下官民合同という異例の送別会が公会堂で開かれたということから、その影響が各層の深部にまで及んでいたことを思わせられる。

昭和十二年（三十四歳）

七月、大日本書道院展が生まれるや総務となり、第一部審査員として活躍。この頃から中央の書道講習会でも助講師・講師をつとめるようになる。

昭和十三年（三十五歳）

このころ、鈴木翠軒氏の中鋒説が書道界を賑わしたが、筆の自然なはたらきによるものにあらずとして反論。

昭和十四年（三十六歳）

一月、比田井天来翁逝去。後任に東京美術学校へ広島高師の石橋岸水氏が移ることになり、そのあとへ推挙されて、四月、広島高師助教として迎えられた。陸軍幼年学校教官も兼任。八月、興亜書道連盟が生まれ総務・審査員となる。また、この月、文部省から国民学校書き方固定教科書執筆の命を受けて九月に上京。高師を依頼退職、講師囑託となり、以後昭和十九年に教科書完成をみるまで、一年のうち五・六か月は東京に滞在してその任にあつた。

た。執筆にあたっては、その責の重大さを思い、普通妥当・穩健中正をねがって、その研究に心血を注ぎ、俗塵を遠ざけて、文字通り精進潔癖して励んだという。

昭和十五年（三十七歳）

この年、一・二年用の教科書と、当時の書き方教育界では異例の指導書を作成して文部省から出版。また、朝鮮總督府の依頼により、朝鮮国民学校の教科書も執筆。

昭和十六年（三十八歳）

三・四年教科書と指導書を作成。十二月には太平洋戦争に突入り、世は戦争一色にぬりつぶされていった。

昭和十七年（三十九歳）

五・六年教科書と指導書を作成。また、興亜書道連盟主催の日滿支親善書道展の審査員として石橋岸水氏とともに中国に渡り、一か月半、南京を中心に上海・蘇州・杭州に清遊。

昭和十八年（四十歳）

四月、賀陽宮治憲王殿下が海軍兵学校入校のみぎり、教育係として兵学校にも勤務することになる。この年、高等科一・二年の教科書および指導書を作成。太平洋戦争はようやく緊迫の度を加えてきた。

昭和十九年（四十一歳）

四月、久邇宮邦昭王殿下が海軍兵学校に入校され教育係を拝命。十月、やっと教科書執筆の大任から解放され、広島高師教授として復職。腰を落ち着けて学生の指導、書道講習会等による一般愛好家への指導・文検指導等に専念するようになった。

昭和二十年（四十二歳）

八月六日、世紀の確災、原爆の洗礼を受けて、爆心地から一キロ半にあった昭和町の自宅は一瞬のうちにつぶされてしまった。かろうじてはい出した長男・次男に夫人もやっと救い出されて知人宅に避難。翌朝、報を聞いて、陸軍幼年学校の疎開先であった庄原からたどりついたものの、多年苦心して集めた古筆・古硯・古墨・名蹟・研究物等のすべては烏有に帰してただ茫然、家族の無事再会が何よりであった。八月十五日終戦。十二月まで庄原に疎開、その後郷里岡山に一たん帰った。

昭和二十一年（四十三歳）

広島高師が賀茂郡乃美尾村の旧兵舎跡に再建され、四月から河内町に間借りして通った。食料事情は極度に悪化し、甘藷の葉茎やヌカだんご等を食する生活が続き、配給された塩に肥料の硫酸がまじっていて家内中がノドを侵かされたり、回虫に悩まされたり最低生活であつた。同僚の教授や学生が、つきつきと倒れていったのもこの頃である。

昭和二十二年（四十四歳）

四月、終戦後四散していた門人を料合して学書研究を再開、耕心書道会を誕生させた。以来毎月研究会を重ね、昭和二十八年には機関誌「耕心」を発刊するようになり、会長としてその指導は現在まで続いている。この年十二月、広島市草津南町の現住所を手して転居。

昭和二十三年（四十五歳）

文部省主催の長期書道講習会講師を依頼せられ、上京して出講。また、文部省書道科検定試験委員を命ぜられその任を担当。

昭和二十四年（四十六歳）

引き続き第二回長期書道講習会に出講。この年、新制広島大学の

発足により、広島大学教育学部教授を兼任。

昭和二十六年（四十八歳）

この年から検定教科書の執筆を始め、中教出版・広島図書・大阪書籍等から小・中・高校の書き方・習字・書道の教科書出版。穩健中正な書風は教育現場から大いに迎えられ、以後、毎年度、教科書採択部数は他の追従を許さない。

昭和二十七年（四十九歳）

三月をもって広島高師は閉校となり、四月から広島大学教育学部教授として移った。終戦後、いくたびか教育課程の変動があり、そのつど不安定なあり方を余儀なくされてきている習字・書道教育界の現場に指針を与えるべく、各地の研究会・講習会への出講生活がこの頃から始まった。

昭和二十八年（五十歳）

四月、主宰する耕心書道会の研究機関誌として「耕心」（月刊）を創刊。

昭和二十九年（五十一歳）

五月、「耕心」の小学校・中学校版を創刊、雑誌を通して全国の小・中学生の指導啓発にのり出した。全国各地への出講の間をぬって、夏には実力養成書道講習会を開き、秋には全国大家の作品を集めて現代書道展を開くなど、地域社会への指導啓蒙も忘れなかつた。

昭和三十年（五十二歳）

教育課程の変動による習字教育の危機到来を感じて、この年には、石橋屏水・田辺古村・浅見喜舟の書道関係四教授相はかって、文部省へ意見を具申している。

昭和三十一年（五十三歳）

七月、三原市仏通寺で第一回全国大学生書道合宿錬成会を開き、全国大学間の年中行事として年々発展していく緒となった。

昭和三十三年（五十四歳）

一月、主宰する耕心書道会の第一回発表展を天満屋で開催、以後毎年の行事となる。

昭和三十三年（五十五歳）

一月の耕心展に全国小・中学生書きぞめ作品展を併催、これも以後毎年継続。

昭和三十四年（五十六歳）

三月、全国小・中・高・大学各書道教育関係者の総団体として「全日本書道教育研究会」が結成されるや副理事となり、以後毎年選ばれてその任に当たる。四月、文部省認定書道通信講座が開設され、その常任講師となった。

昭和三十五年（五十七歳）

一月、叔父の「漢故陰府君墓誌銘」についての研究の中間発表を行ない、同墓誌を世に公表。

昭和三十六年（五十八歳）

八月、文部省社会教育課の斡旋により文部省公認硬筆書写技能検定協会が発足、石橋厚水氏ら十四名とともに理事に選ばれた。

昭和三十七年（五十九歳）

七月、全国大学生書道合宿錬成会は第七回を迎え、参加校二十八、参加者百四十名にも達して大学間の定例大行事として成長。全国各地の各種研究会・講習会に出講しての教育現場への指導は相変わらず続き、また各種全国書道展の審査員として活躍するな

ど、多忙な生活の連続である。

昭和三十八年（六十歳）

一月、門人の手により還暦祝賀会が開かれ、記念行事の一環として「桂園葦甲展」を、続いて三月には「桂園一門展」を天満屋で開催。